

【審査論文】

教員採用試験からみる家庭科教員が衣生活分野で求められる力

柴田優子

A Study of Faculty on Clothing Life of Home Economics Teacher in Teacher's Employment Examination

SHIBATA Yuko

要旨

平成30年度に実施された教員採用試験は、新学習指導要領を踏まえた上で、各教育委員会が求める『教員として備わっていてほしい力』が備わっているかを問うために実施したものと捉え、平成30年度に実施された教員採用試験の家庭科の専門教養についての分析を試みた。家庭科の出題の傾向を明らかにするとともに、衣生活分野に着目して、設問および解答から教員として備わっていてほしい学力や課題を見いだすことを目的とした。

研究方法は、各自治体の教育委員会が平成30年度に実施した教員採用試験の筆記問題を対象とした。まず、家庭科の専門教養となる出題分野（家族・家庭、幼児・保育、高齢者・福祉、衣生活、食生活、住生活、消費生活・環境、ホームプロジェクト）と、学習指導要領に関する設問、場面指導法に関する設問の計10分野に分類し、試験問題の各設問について、出題分野、出題数、配点を調査した。次に、衣生活分野を7領域（和服、衣文化、機能・着装、材料、構成、管理、安全・環境）に分類して、設問文および解答の記述をテキストデータとし、テキストマイニング手法で領域ごとの設問の特徴を分析した。

その結果、家庭科の出題分野では、食生活と衣生活は必ず出題されること、保育・幼児、住生活、消費環境は約90%以上、家族・家庭、高齢者・福祉、学習指導要領は70%以上の確率で出題されていることがわかった。衣生活分野での領域別出題率は、構成は79.4%、材料は67.2%、管理は66.2%、和服は41.2%、安全・環境は26.5%、衣文化と機能・着装は25.0%となり、出題される領域には差異があることがわかった。また、学習指導要領の改定に伴い、和裁や織物や染物の伝統技法などの出題もみられた。

キーワード：家庭科教育 (Home economics education)、家庭科教員 (home economics teacher)、教員採用試験 (teacher's employment examination)、衣生活分野 (learning clothing life)

1. はじめに

公立学校教員採用選考試験（以降、「教員採用試験」という）は、各都道府県・指定都市教育委員会が、受験者の資質能力、適性を多面的に評価するため、一般教養・教職教養・専門教養などの筆記試験のほか、面接、実技、作文・小論文、模擬授業等を組み合わせて採用選考が実施されている。試験問題は各教育委員会により作成されており、採用する側の求める知識や技能が反映された試験問題となっている。全国の家庭科の専門教養を比較すると、出題分野や配点等に差異があるように感じられた。家庭科は「総合科学」

の1つの科目とされており、学習内容が多岐にわたるため、全分野から出題されることは稀で偏りがあることもみてとれた。

また、学習指導要領については、中学校が平成29年3月に、高等学校が平成30年3月に新学習指導要領^{1,2)}が告示された。中学校および高等学校の教育内容の主な改善事項^{3,4)}に「伝統や文化に関する教育の充実」があり、中学校の技術・家庭では「和食や和服の指導」、高等学校では「和食、和服及び和室など、日本の伝統的な生活文化の継承・創造に関する内容」および「環境に配慮した生活の工夫」の充実が挙げられている。中学校では昨年度(平成30年度)から、高等学校では本年度(令和元年度)から移行期間に入っており、中学校では令和3年度から、高等学校ではその翌年度から全面実施が決まっている。そのため、平成30年度に実施された教員採用試験には、少なからず新学習指導要領の影響が出ていると考えられた。

教員採用試験についての先行研究はほとんどないのだが、太田⁵⁾は専門教科で分けることなく教員採用試験の制度について述べている。また専門教科として家庭科について研究したものには、小清水⁶⁾が2008年度実施の全国の採用試験問題の特徴を分析したものがある。これでは、出題形式や出題分野等の分析をしており、全体の概観をとらえるところまでの分析がされている。2008年は前回の指導要領改訂の頃となり、現行の学習指導要領(中学校は平成20年告示、高等学校は平成21年告示)を反映した設問であったと考えられることから、新たに2018年度を調査することには意味がある。またいずれの出題分野についても細かく分析するところまでは至っておらず、設問および解答の文言までの研究はしていない。

そこで、平成30年度に実施された教員採用試験は、新学習指導要領を踏まえた上で、各教育委員会が求める『教員として備わっていてほしい力』が備わっているかを問うために実施したものと捉え、この教員採用試験の家庭科の専門教養についての分析を試みた。家庭科の出題分野の傾向を明らかにするとともに、その1つの衣生活分野に着目して、設問および解答で使われているテキストデータをテキストマイニングすることで、衣生活分野の特徴を詳細に捉え、教員として備わっていてほしい学力や課題を見いだすことを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査対象

各都道府県(47)・指定都市(20)・豊能地区(大阪府)の教育委員会が平成30年度に実施した教員採用試験のうち、公開された中学校の「技術・家庭」および高等学校の「家庭」の専門教養の試験問題である。1次試験の筆記問題を対象とし、1次試験で専門教養科目を課していない教育委員会については2次試験を対象とした。また、1次試験において筆記試験だけでなく実技試験や面接試験、場面指導などを課す教育委員会もあるが、評価の観点から明らかにされていないことから、本研究では調査対象としなかった。ただし、筆記試験問題用紙に実技試験問題が記載されている場合は調査対象に含めた。教育委員会によって、中高別の問題、中高共通問題、一部のみ中高別でその他は共通問題などで実施状況が異なったが、中高別に公開されていても問題内容が衣生活分野以外の一部のみ選択問題のものは中高共通問題として取り扱ったところ、中学校のみが24件、高等学校のみが17件、中高共通が27件の計68件が対象となった。内訳は表1に示す。

表1 調査対象

学校種	中学校のみ	高等学校のみ	中高共通
教育委員会名	北海道、岩手県、秋田県、山形県、福島県、群馬県、埼玉県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、滋賀県、京都府、京都市、大阪府・大阪市・豊能地区、和歌山県、鳥取県、岡山市、山口県、香川県、愛媛県、長崎県、熊本県、宮崎県、	北海道、岩手県、山形県、福島県、群馬県、埼玉県、長野県、岐阜県、静岡県、滋賀県、京都府、鳥取県、山口県、香川県、愛媛県、長崎県、熊本県	青森県、宮城県、茨城県、栃木県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県・新潟市、富山県、石川県、福井県、愛知県、名古屋市、三重県、兵庫県、神戸市、奈良県、島根県、岡山県、広島県、徳島県、高知県、福岡県、佐賀県、大分県、鹿児島県、沖縄県
教育委員会数	24	17	27

(2) 調査および分析方法

(2)-1 家庭科の出題分野について

試験問題の各設問について、出題分野、出題数、配点を調査した。出題分野については、学習指導要領や高等学校の教科書⁷⁻¹⁰⁾を参考に、家庭科の専門教養となる、家族・家庭、幼児・保育、高齢者・福祉、衣生活、食生活、住生活、消費生活・環境、ホームプロジェクトの8つの分野と、学習指導要領に関する設問、場面指導法に関する設問の計10分野に分類した。この他に、家庭科の試験問題の中に、教職教養や道徳の問題を含んでいる教育委員会もあったが、家庭科の専門教養の部分のみを調査対象とし、それ以外の設問を調査対象から除外した。教育委員会ごとに、出題のあった分野を調査するとともに、出題数および配点についても調査した。各教育委員会で試験時間や設問数、調査対象とした総合計点の値に違いが見られたため、出題数は「分野別出題数/総出題数×100」、配点は「分野別配点合計/総合計点×100」で算出した。これらの数値より、SPSSを用いて統計的な処理を行い、家庭科における出題の特徴を分析した。

(2)-2 衣生活分野の出題領域について

衣生活分野の設問について、学習指導要領に基づき内容を分類すると、「日本の伝統的な和服」、「地域の気候や風土で培われた衣文化」、「ライフステージや目的に応じた被服の機能と着装」、「服飾材料・被服構成・被服衛生」、「被服計画・管理、安全で健康や環境に配慮した被服の管理」となる。このうち、「ライフステージや目的に応じた被服の機能と着装」と「被服衛生」や、「日本の伝統的な和服」の中に和服の構成方法があるなど、内容に重なる部分があるため、①日本の伝統的な和服（以降「和服」領域とする）、②地域の気候や風土で培われた衣文化（以降、「衣文化」領域とする）、③ライフステージや目的に応じた被服の機能と着装（以降、「機能・着装」領域とする）、④服飾材料（以降、「材料」とする）、⑤被服構成（以降「構成」とする）、⑥被服計画・管理（以降「管理」とする）、⑦安全で健康や環境に配慮した被服の管理（以降、「安全・環境」とする）の7つの領域とし、①～③・⑦と④～⑥のいずれにも内容が含まれる場合は、①～③・⑦を優先するように分類した。

また設問文および解答の記述をすべて書き出した。テキストデータの解析はKH Coder¹¹⁻¹³⁾を用い、テキストマイニング手法で衣生活分野の設問の特徴を分析することを試みた。設問から得られたテキスト

データを領域ごとにまとめ、結合ファイルを作成した。テキストデータから正しく構成要素を抽出するため解析対象の構成要素を整理し、分析を改善するために標記のゆれや同種の語を1つの語に置き換えたり、重要な複合語は複合語として抽出したりしてデータクレンジングの手続きを行った。例えば、えり、衿、襟は「衿」に、合成繊維は「合成」、「繊維」ではなく「合成繊維」となるように設定した。得られた構成要素のうち、頻度2以上のものを対象に、領域別の特徴語の抽出と共起ネットワークの分析および対応分析を行った。

3. 結果および考察

(1) 家庭科の出題分野について

各教育委員会で実施された教員採用試験において、専門教養である家庭科の出題分野を確認したところ、図1のような結果となった。食生活と衣生活はすべての教育委員会が出題しており、保育・幼児、住生活、消費環境においては約90%以上、家族・家庭、高齢者・福祉、学習指導要領については70%以上の教育委員会が出題しており、これらの分野は重要視され出題されることがわかった。一方、ホームプロジェクト

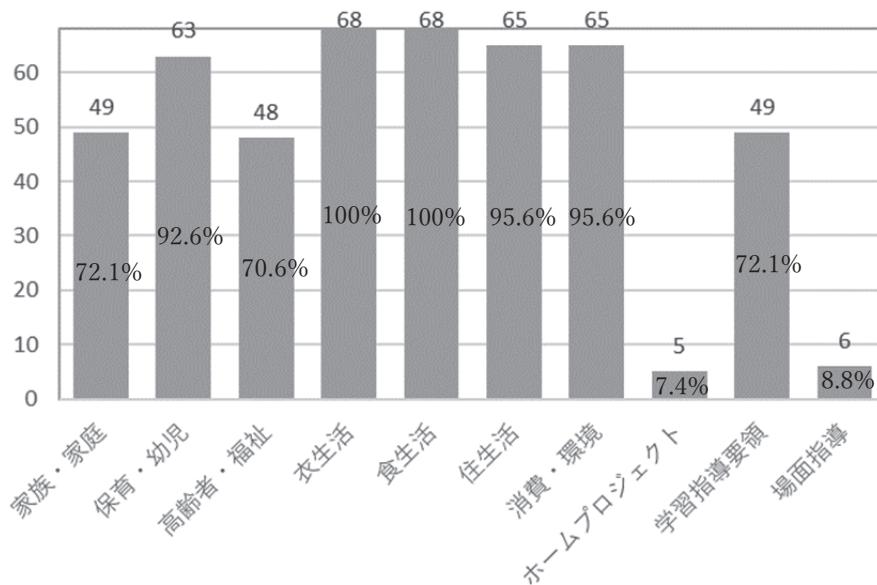


図1 家庭科における分野別出題教育委員会数 (出題率)

表2 家庭科における出題分野数

	中学校のみ	高等学校のみ	中高共通	合計
4分野	1	0	0	1
5分野	3	2	1	6
6分野	6	2	4	12
7分野	5	1	9	15
8分野	7	8	14	29
9分野	0	4	1	5

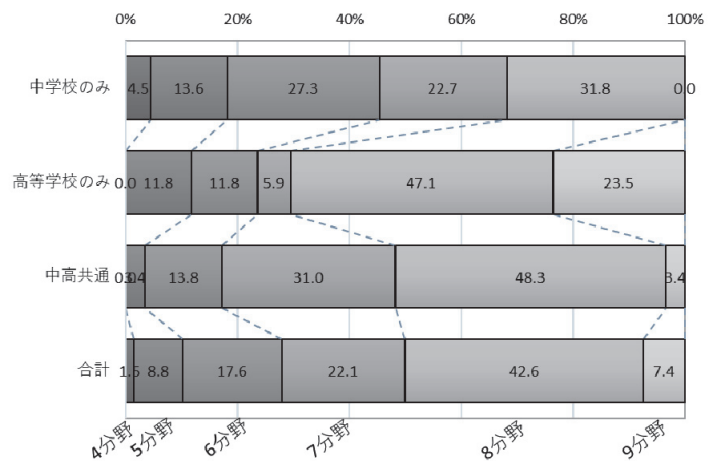


図2 家庭科における出題分野数の割合

トと場面指導の出題率は10%未満で、教育委員会によって出題するか否かは異なることがわかった。また、小清水⁶⁾による10年前データと比較すると、とても類似した結果が得られており、この出題分野の傾向は10年以上続いていることが明らかとなった。また、それぞれの教育委員会が出題した分野の数をまとめたものを、表2と図2に示す。これより、中学校のみでは6～8分野が多く、中高共通では7・8分野、高等学校のみでは8分野が最も多く、中学校のみ<中高共通<高等学校のみの順で出題分野数が多くなる傾向がみられた。出題分野から見ても中学校より高等学校の方が広い知識を求められていることがわかった。

次に、設問について調べると、全設問数は4296問であった。すべての専門教養の分野となる、家族・家庭、幼児・保育、高齢者・福祉、衣生活、食生活、住生活、消費生活・環境、ホームプロジェクトを出題していたのは7つの教育委員会のみで、このうち4つが高等学校のみ、3つが中高共通の教育委員会であった。また、中学校の教科書¹⁴⁻¹⁶⁾では、家族・家庭、幼児・保育、高齢者・福祉は同じ分類にされることが多く、ホームプロジェクトは高等学校のみで扱われるものであるため、家族・家庭、幼児・保育、高齢者・福祉の3分野のいずれかと、衣生活、食生活、住生活、消費生活・環境の5分野が中学での全分野と捉えた場合、この全分野を出題していたのは59の教育委員会であることがわかった。そして、およそ13%に当たる9つの教育委員会は出題分野に偏りがあることがわかった。出題分野別にみる出題数およびその割合を表3、図3・4で示す。表3において、最小値が0.0%となっているところは、出題がなかった場合があ

表3 家庭科における分野別にみる出題割合 (%)

	中学校のみ(24件)			高等学校のみ(17件)			中高共通(27)			全件		
	最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値
家族・家庭	0.0	18.1	4.1	0.0	17.5	8.0	0.0	20.5	6.3	0.0	20.5	6.0
保育・幼児	0.0	15.6	8.4	2.5	20.0	13.3	5.6	21.2	11.4	0.0	21.2	10.9
高齢者・福祉	0.0	10.1	2.2	0.0	21.3	7.4	0.0	18.8	7.1	0.0	21.3	5.5
衣生活	7.3	38.7	18.6	10.3	38.3	20.6	11.1	36.8	20.1	7.3	38.5	19.7
食生活	14.8	55.2	27.8	14.1	34.6	24.5	2.6	35.0	24.8	2.6	55.0	25.7
住生活	0.0	22.6	12.0	0.0	17.5	9.5	0.0	18.6	9.5	0.0	22.5	10.3
消費生活・環境	5.2	23.5	14.1	0.0	16.0	8.7	3.2	24.7	12.0	0.0	24.7	11.9
ホームプロジェクト	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	0.4	0.0	6.1	0.3	0.0	6.1	0.2
学習指導要領	0.0	32.2	12.7	0.0	18.2	7.6	0.0	48.4	7.8	0.0	48.4	9.4
法令	0.0	1.6	0.1	0.0	2.1	0.1	0.0	10.9	0.6	0.0	10.9	0.3
場面指導	0.0	18.1	4.1	0.0	17.5	8.0	0.0	20.5	6.3	0.0	20.5	6.0

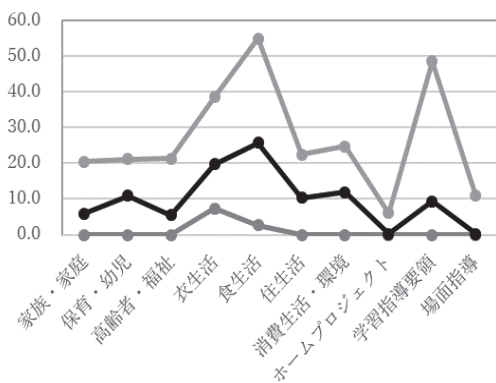


図3 家庭科における分野別出題割合(%)
(最大値・最小値・平均値)

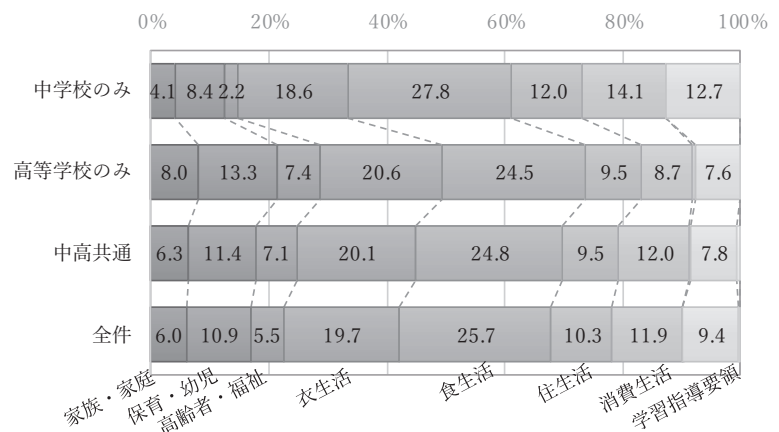


図4 家庭科における分野別出題割合の比較

ることを示している。ここからも、衣生活、食生活分野は必ず出題されており、それ以外の分野では出題されないことがわかる。図4の全件の分野別出題率を見ると、食生活は平均で25.7%と4分の1は食生活についての出題がされており、全く出題されないことはなく、最大55.0%と半分以上を占めることがあるとわかった。衣生活は平均で19.7%と5分の1は食生活についての出題がされており、全く出題されないことはなく、最大38.5%を占めることがあるとわかった。学習指導要領は平均9.4%であるにも関わらず、出題がないことや、最大値が48.4%と約半分を占めることもあるとわかり、この分野は教育委員会によって出題される量に差異が大きいことが明らかとなった。図3を見ると、ホームプロジェクトと場面指導だけが極端に少ないことがわかった。分野によって出題される分量に大きく差があることが明らかとなった。なお、配点についても設問数と同様に検討したところ、出題数と同じ傾向の結果となったため、ここでは割愛する。

(2) 衣生活分野の出題領域について

各教育委員会で実施された教員採用試験において、家庭科分野の出題領域を確認したところ、図5のような結果となった。すべての教育委員会が出題している領域はなく、出題率が高い順に、構成は79.4%、材料は67.2%、管理は66.2%、安全・環境は26.5%、衣文化と機能・着装は25.0%、和服は41.2%となった。また、それぞれの教育委員会が出題した領域の数をまとめたものを、表4と図6に示す。これより、中学

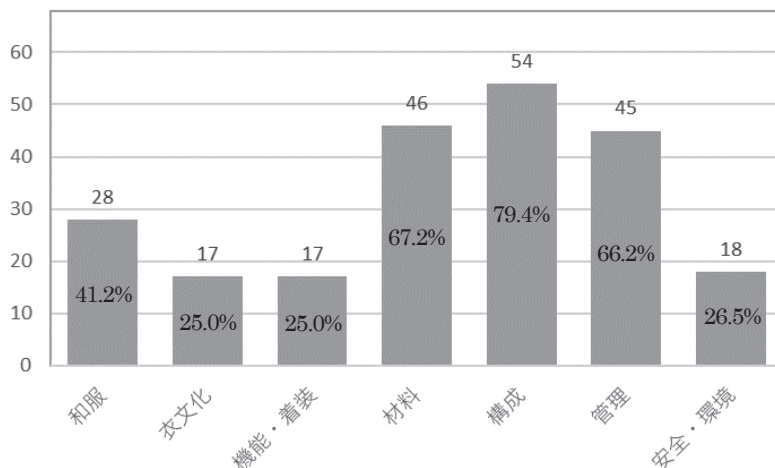


図5 衣生活分野における領域別出題教育委員会数

表4 衣生活分野における出題領域数

	中学校のみ	高等学校のみ	中高共通	合計
1領域	7	0	2	9
2領域	3	1	6	10
3領域	7	8	5	20
4領域	4	3	7	14
5領域	1	5	5	11
6領域	0	1	3	4

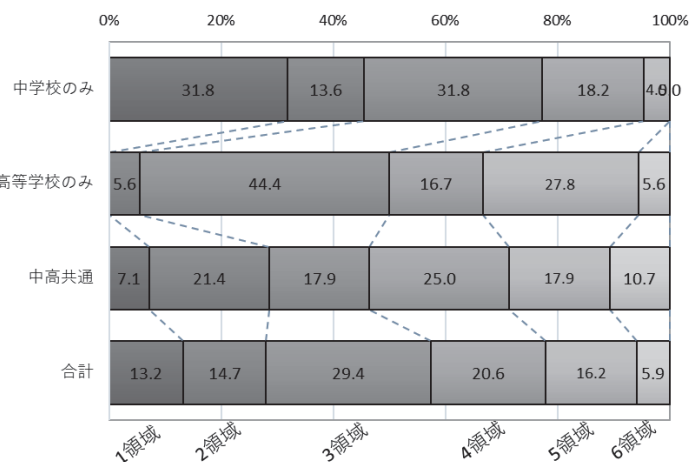


図6 衣生活分野における出題領域数の割合

校のみでは1領域と3領域が多く、次に4領域が多かった。高等学校のみでは3領域が最も多く、5領域、4領域と続いた。中高共通では4領域、2領域、3・5領域となっていた。これより、高校のみが最も出題される領域が多いことがわかった。先の表3および図3からもわかるように、衣生活分野は家庭科の出題においておよそ20%を占めるほど設問数は多いが、設問数の割合の範囲は7.3～38.5%と幅があるため、出題領域数は設問数の影響も受けていると考えられた。

次に、衣生活分野の設問数をみると、873問であった。この数字は、配点が別となっている設問数となっており、設問の文章数は506であった。つまり、1つの文章問題で、解答が2つ必要なものは、設問数が2、文章数は1となる。テキスト分析をするため、設問の文章のあとに解答を追記して、設問文を整理した。その結果、設問文は、和服が47件、衣文化が22件、機能と着装が21件、材料が87件、構成が185件、管理が106件、安全・環境が38件となった。これらの設問文をテキストデータとし、この分析に当たっては、KH Coderを用いてテキストマイニングを施した。表5は領域別にみる設問文で用いられた言葉のうち、頻度が上位の抽出語リストであり、それぞれの領域の特徴語を示す。次にテキストデータを対象として、領域別に語と語の関係を表す共起ネットワークをそれぞれ作成した(和服:図7、衣文化:図8、機能・着装:図9、材料:図10、構成:図11、管理:図12、安全・環境:図13)。その際、共起語を探すためのJaccard係数を用いた。Jaccard係数は0から1の間の値であり、これが大きいほど二つの語の共起度が高いことを表すものである。共起ネットワークは円が大きいほど出現回数が多いことを表し、語と語が線で結ばれているかどうか共起性や関連性の有無を表し、線の太さが関連性の強さを表現している。ただし、円の位置や近さは共起性とは無関係である。

和服について特徴語をみると、衿、衽、身八つ口、袖といった女物長着の部位名が並んでいることがわかる。共起ネットワークを合わせてみると、A群は「締める」「整える」「上前」「腰ひも」「重ねる」「整える」など、和服の着装手順に関する語が関係しており、B群は「長着」「単」「人形」など、和服特有の構造や部位の呼称、C群は「居敷当て」とその縫い代である「1cm」や「くけ」など、和裁の技法に関係する語があがっている。高等学校の教科書では和服の構造や部位の呼称、着装手順については掲載されているものが多いが、現行の教科書には和裁の技法を取扱ったものはない。学習指導要領の改訂に対応して、和服に対する深い理解を求めようになった影響だと考えられる。教科書の域を超えて、家庭科教員には和裁

表5 衣生活分野における領域別特徴語一覧(上位10位まで)

和服		衣文化		機能・着装		材料	
衿	.424	民族	.227	体温	.238	繊維	.388
女物	.391	平面構成	.217	皮膚	.238	ポリエステル	.245
長着	.370	日本	.200	空気	.222	綿	.205
単	.298	体	.185	機能	.192	レーヨン	.182
衽	.283	伝わる	.182	着る	.177	絹	.177
身八つ口	.261	江戸	.174	保温	.177	化学繊維	.169
位置	.255	伝統	.174	生活	.154	ナイロン	.152
浴衣	.250	和服	.167	社会	.143	光沢	.151
袖	.246	直線	.160	TPO	.143	吸湿	.149
折る	.211	縫い合わせる	.160	生理	.143	断面	.148
構成		管理		安全・環境			
布	.286	洗濯	.393	リサイクル			.342
製作	.192	洗剤	.315	環境			.333
ミシン	.173	汚れ	.261	製品			.250
縫う	.152	表示	.256	生産			.225
型紙	.139	界面活性剤	.255	回収			.211
縫い代	.137	漂白剤	.208	ファッション			.184
糸	.104	塩素系	.179	配慮			.184
針	.101	付着	.157	衣生活			.164
裏	.096	水	.151	資源			.162
始末	.094	繊維	.151	労働			.162

りが薄く、一方で三原組織については同じパターンでの設問が多くみられたため、線が密になっていることがわかった。

構成について特徴語と共起ネットワークを合わせてみると、L群はミシンの正しい使用方法について、M群は身体計測と衣料サイズについて、その他の部分は「地直し」「布目」「型紙」など製作の型紙の準備から型紙を配置するまでが多く出題されていることがわかる。また、「体型」と「補正」との繋がりが関係しており、補正方法を問う問題が多く出題されたことが示された。高等学校の教科書では補正方法は掲載されていないが、製作実習で被服を製作した場合、教員は個対応で補正することが求められる。現行の教科書では被服よりも布小物の製作が中心であったが、新学習指導要領の高等学校家庭総合についての解説¹⁷⁾をみると、身体を覆う「衣服」を中心として扱うこととすると明記されたように、布小物から被服へ移行することで新たに必要となった力として捉えることができるだろう。

管理について特徴語と共起ネットワークを合わせてみると、N群は「洗濯機」「液温」「限度」といった洗濯処理について、「アイロン」「底面」「温度」といったアイロン処理について、「干す」「日陰」「吊る」といった自然乾燥について、「漂白剤」「塩素系」「酸素系」といった漂白処理について、「ドライクリーニング」「溶剤」といった商業クリーニング処理についてなど、家庭洗濯等取扱いの表示に関する語が関係しているのがわかる。O群は乾式洗濯つまりドライクリーニングとその溶剤についてであり、その他は洗剤の種類と洗剤の働きに関する語句がプロットされている。洗濯絵表示に関する出題は顕著に多かった。

安全・環境について特徴語と共起ネットワークを合わせてみると、P群のキーワードは「エシカルファッション」である。これは、特徴語においても16位であった。エシカルファッションとはデザインと確かな品質そして、良心を大切にしたファッションのことで、高等学校の教科書では、4社中1社のみが記載していた。良心を大切にすると、環境に負荷をかけないオーガニックコットンやリサイクル素材を発展途上国から購入し、天然染料を使用して染色し、地域の伝統技術や製法を継承して、流通はフェアトレードにする⁸⁾ことであるため、それにかかわる言葉が共起ネットワークにおいて、関連語句として繋がっていることがわかる。Q群はファストファッションに関する言葉、R群は着方による省エネルギーに関する言葉、S群は衣服の流通に関する言葉、それ以外はリサイクル等、衣服の廃棄に関する言葉が関係していることがわかる。安全・環境という領域としたが、設問は環境が中心となっていることが明らかとなった。これらは新学習指導要領の目標の1つである、持続可能な社会を目指して主体的に行動できるよう、安全で安心な生活と消費について考察し、ライフスタイルを工夫することに対応した設問だと考えられる。この領域は時代の最先端の技術、考え方等に影響を受けやすいため、教員は敏感に情報を収集していく必要があるだろう。

最後に、衣生活分野の7領域の関係性や抽出語の関係性について、最低出現数15の抽出語として対応分析した結果を図14に示す。この図は原点から距離が離れるほど特徴的な語であると言え、原点付近ほど特徴が弱い語だと言える。関連性についても強いものは近く、弱いものは遠くにプロットされる。つまり、和服と構成および機能・着装、材料、安全・環境では、それぞれは関連性が高い設問であったこと、管理は他の領域と全く別の設問であることが示された。採用試験において3領域しか出題できないとすれば、和服か構成のいずれかと、機能・着装、材料、安全・環境のいずれかと、管理から出題することが有効だと言えよう。

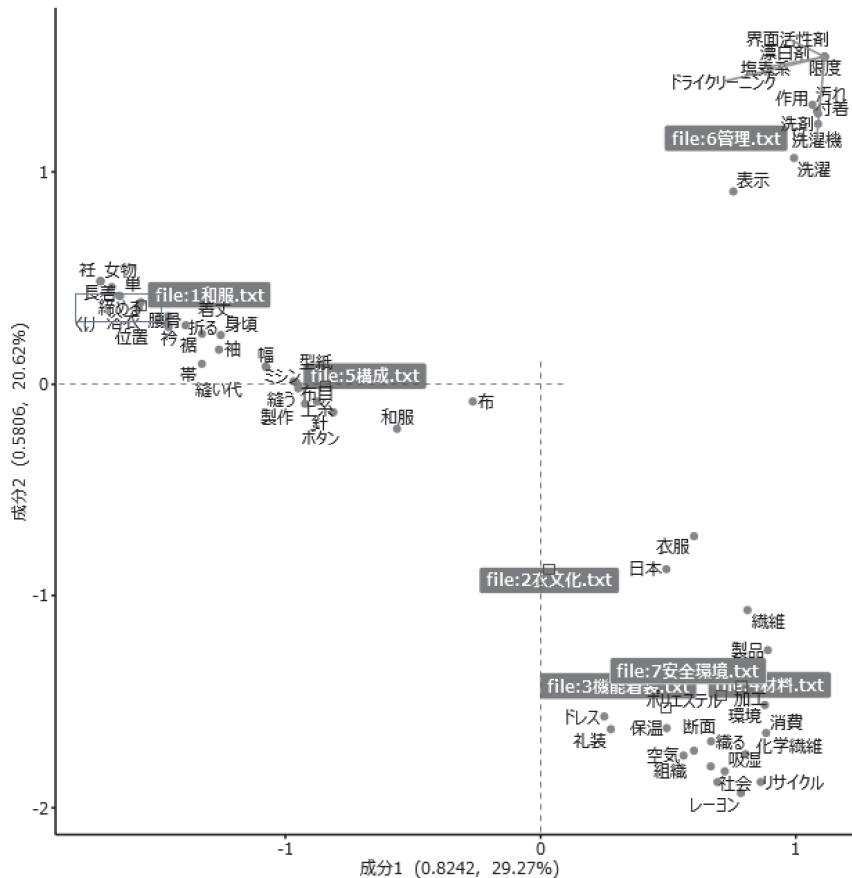


図14 衣生活分野の対応分析結果（バブルプロット）

4. まとめと今後の課題

本研究の目的は、全国の教員採用試験の分析を通して、中学校および高等学校の家庭科の教員に求められる力を明らかにするとともに、衣生活分野で求められる知識や技能の詳細を明らかにすることである。得られた結果は次の通りである。

- (1) 家庭科の出題分野では、食生活と衣生活はすべての教育委員会が出題しており、保育・幼児、住生活、消費環境においては約90%以上、家族・家庭、高齢者・福祉、学習指導要領については70%以上の教育委員会が出題していた。一方、ホームプロジェクトと場面指導の出題率は10%未満で、これらは出題されにくいことがわかった。
- (2) 家庭科の出題分野数では、中学校のみでは6～8分野が多く、中高共通では7・8分野、高等学校のみでは8分野が最も多く、中学校のみ<中高共通<高等学校のみの順で出題分野数が増える傾向がみられた。出題分野から見ても中学校より高等学校の方が幅広い知識を求められていることがわかった。
- (3) 衣生活分野での領域別にみる出題率は、高い順に、構成は79.4%、材料は67.2%、管理は66.2%、和服は41.2%、安全・環境は26.5%、衣文化と機能・着装は25.0%であった。
- (4) 衣生活分野の設問および解答をテキスト分析したところ、和服では着装手順、特有の構造や部位の呼称、和裁の技法について出題されていた。衣文化では立体構成と平面構成の違い、日本の服飾史、織物や染物の伝統技法、世界の民族衣装が出題されていた。機能・着装では社会生活上の機能と保健衛生上の着装が出題され、自己表現や自分らしいコーディネートは出題されていない。材料

では繊維について天然繊維、化学繊維ともに繊維名とその原料や長所、短所、主な用途、さらに繊維の断面、側面の様々な種類の設問があった。三原組織の設問も多かった。構成では身体計測と衣服サイズ、製作の型紙の準備から型紙の配置の設問が多く、さらに被服製作における補正方法の設問もみられた。管理では家庭洗濯等取扱いの表示、洗剤の種類と洗剤の働きの出題が多かった。安全・環境では環境の設問が中心で、エシカルファッション、ファストファッション、省エネルギー、衣服の流通、衣服の廃棄についての出題が多かった。

- (5) 衣生活分野の7領域の関係性や抽出語の関係性について対応分析した結果、和服と構成および機能・着装、材料、安全・環境では、それぞれは関連性が高い設問であったこと、管理は他の領域と全く別の設問であることが明らかとなった。

本研究では教員採用試験の概観と、衣生活分野の出題傾向の分析を試みた。今後は各領域の出題が多かった設問だけでなく、稀であっても特徴的なキーワードを丁寧に抽出することや、衣生活分野だけでなくほかの分野についての分析を試みたいと考える。また、今回は2018年度分のデータを使用したが、新学習指導要領が施行された数年後や、1カ年だけでやるのではなく、3～5カ年の採用試験問題から同様の分析をしたり、定期的に数年ごとに分析することで求められる力の変遷を捉えたりするなど、家庭科教員に求められる知識をもっと詳細まで明らかにする方向へ繋げていきたい。

謝辞

本研究は全国の教員採用試験の過去問の収集において、時事通信出版局教育事業部、野口紋子氏に全面的にご支援いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省, 中学校学習指導要領 (平成29年告示), 2017
- 2) 文部科学省, 高等学校学習指導要領 (平成30年告示), 2018
- 3) 文部科学省, 幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afeldfile/2019/02/19/1384661_001.pdf, 2019.8.1閲覧
- 4) 文部科学省, 高等学校学習指導要領等の改訂のポイント, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afeldfile/2019/02/19/1384661_002.pdf, 2019.8.1閲覧
- 5) 太田和敬, 教員養成と教員採用試験問題, 文教大学教育研究所紀要, 19, 35-42, 2010
- 6) 小清水貴子, 教員採用試験にみる家庭科教師に求められる力, 静岡大学教育学部研究報告 (教科教育学篇), 42, 213-220, 2011
- 7) 文部科学省検定教科書高等学校家庭科用, 高等学校 新版 家庭総合, 183第一家総合312, 第一学習社, 2019
- 8) 文部科学省検定教科書高等学校家庭科用, 家庭総合 明日の生活を築く, 9開隆堂家総310, 開隆堂, 2019
- 9) 文部科学省検定教科書高等学校家庭科用, 家庭総合 自立・共生・創造, 2東書家総307, 東京書籍, 2019
- 10) 文部科学省検定教科書高等学校家庭科用, 家庭総合 ともに生きる 明日をつくる, 6教図家総302, 教育図書, 2019
- 11) 樋口耕一, KH Coder, <http://kncoder.net/>, 2019.8.1閲覧
- 12) 末吉美喜, テキストマイニング入門 ExcelとKH Coderでわかるデータ分析, オーム社, 2019
- 13) 山崎保寿, 新学習指導要領 (2017-2018年改訂) を踏まえた主権者教育の方法に関する研究 (その2) -新たな教育環境を構築する高等学校の実践事例とその分析-, 松本大学研究紀要, 17, 33-41, 2019
- 14) 文部科学省検定教科書中学校技術・家庭科用, 技術・家庭 家庭分野, 9開隆堂家庭726, 開隆堂, 2018
- 15) 文部科学省検定教科書中学校技術・家庭科用, 新編 新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して, 2東書家庭724, 東京書籍, 2018
- 16) 文部科学省検定教科書中学校技術・家庭科用, 新技術・家庭 家庭分野, 6教図家庭725, 教育図書, 2017
- 17) 文部科学省, 家庭編高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説, 2018

柴田 優子 (和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 助教)

(2019年10月8日受理)